

# 郷土博物館・文学館だより

## 第14回 渋谷現代短歌募集 優秀作・佳作発表

渋谷には、明治時代から現在に至るまで、多くの文学者が住み、近代短歌の発展に貢献してきた雑誌『明星』や『アララギ』も渋谷で発行されました。当館では、こうした渋谷の文学風土を継承し、区民をはじめ多くの方々に渋谷を再発見していただく機会として、年に一度、「渋谷」を題材にした短歌を募集しています。

14回目を迎えた平成25年度は、52名から206首が寄せられました。この中から優秀作5首、佳作5首が選ばれ、作品を書写した色紙は、当館と渋谷区役所中央エレベータ前ホールに展示されました。

5月14日には当館で表彰式が行われました。表彰者の中には、当館主催の文学講座「短歌をつくろう」で経験を積んで挑戦した結果、

受賞に至った方もいらっしゃいました。

平成26年度も10月から短歌の実作を中心とした講座を開講します。より多くの方の講座参加と「第15回渋谷現代短歌募集」への応募を期待しています。



表彰式に出席された入選者の皆さん

### 第十四回渋谷現代短歌く優秀作・佳作く

元聖徳大学教授 逸見久美選

#### 〔優秀作〕

区の旗に渋谷の一字デザイン化

城の名残りを今の世につぐ(飯淵 真善)

八百の世の移ろうものを眺め居て

金王桜は今日また咲けり(系井 修三)

あかね空に群青の富士きわだてば

カメラ集まる幡ヶ谷跨線橋 (井波 正子)

駅前のスクランブルな交差点

交わりそうで交わらぬ民(清松 涼子)

北斎の浮世絵にある原宿は

水車の回るのどかな野なり(中井真知子)

#### 〔佳作〕

満天の星は夜空に瞬いて

コスモフラネタリウム渋谷の宇宙(大庭 香江)

こっそりと丈も短く咲きおりぬ

金王宮に秋明菊は(加瀬 誉子)

宮益坂下り上りて五十餘年

時うつろいて知る人もなき(小林 綾子)

戦後まだ落ち付かぬ頃おしやれ生地

さがし歩いた道玄坂下(寺田 明子)

渋谷氏の栄枯を語る金王社

鎌倉道を見下して建つ(平塚 純造)

## 関東大震災と渋谷 一発展の契機一

大正 12 年(1923)9 月 1 日午前 11 時 58 分、関東を巨大地震が襲いました。その規模はマグニチュード 7.9、震源地は相模湾西北部と計測されました。昼食の用意のために火を使用している家が多かったことから、地震の被害に加え、火災により甚大な被害が出ました。東京では 3 日未明まで燃え続け、下町一帯から山の手の一部にかけて東京の 3 分 2 が焼失しました。震災に関わる死者は、99,331 名、負傷者 103,733 名、行方不明者 43,476 名、全壊家屋 120,266 戸、半壊家屋 126,233、焼失家屋 447,128、流失家屋 868 戸、被災者数は 34,000 人にもものほりました。(『震災予防調査報告』大正 14 年より)

渋谷(渋谷町・千駄ヶ谷町・代々幡町)での被害は、全壊家屋 274 戸、死者 19 名、倒壊家屋より救出された者 117 名でした。火災は 4カ所で発生しましたが、早い段階での消火に成功し、被害の拡大を防ぎました。

渋谷の被害が比較的軽かったため、被災民が多数押し寄ることになりました。大正 12 年 9 月 14 日の東京府調査によれば、避難者は渋谷町 45,000 名、千駄ヶ谷町 23,114 名、代々幡町 19,949 名で三町合計 88,063 名にのぼっています。

三町は町内の被害について応急処置を講ずるとともに、避難民収容のため、学校や寺社、その他公共施設などを開放するなど、全力をあげ対応しました。しかし、日をおうごとに増加する避難民を収容しきれなくなり、一般の民家にも宿泊を要請しました。さらに千駄ヶ谷に住む

公爵・徳川家達が避難民のために邸宅の一部を提供しました。それでも収容場所は十分ではなく、やがて明治神宮北参道の路傍に市営バラックが作られることによって、ようやく野外で夜を明かす避難民は見られなくなりました。

食料の確保も大きな問題であり、三町はそれぞれ府・市と交渉するなどして援助を仰ぎ、炊出配給を行いました。その後、米や副食物の配給を行うなど、避難民の救済に尽力しました。

明治から大正にかけての渋谷は、まだ、都市の近郊という位置付けでした。しかし現在の山手線や中央線の敷設に伴い、渋谷が通勤圏内になると、東京市で増加した労働者が移り住むようになりました。これにさらに拍車をかけたのが「関東大震災」でした。震災により渋谷では急激に人口が増加し、宅地化が進み、急速な都市化が見られました。さらに、昭和 7 年には渋谷町・千駄ヶ谷町・代々幡町の三町が合併して渋谷区が誕生しました。この時初めて渋谷区は東京市に編入され、その後は大都市へとさらなる発展を遂げ、今日に至ることになります。



震災で倒壊した家屋(笹塚付近)

## 徳富蘆花と原宿

小説「不如帰」などで有名な徳富蘆花（本名徳富健次郎）は、明治時代後半の一時期、原宿に住んでいたことがありました。

蘆花は明治元年（1868）、現在の熊本県水俣市で生まれました。兄は明治時代を代表するジャーナリスト、徳富蘇峰です。11年、兄と同じく京都の同志社に入りますが、兄が同志社を退学すると、蘆花も帰郷して熊本共立学舎、ついで兄の設立した大江義塾で学びます。19年に同志社に復学しますが、恋愛問題により再び退きます。そして22年に上京。兄が経営する民友社に入ります。そこで校正や翻訳等を行いながら、自分でも文章を発表するようになりました。

30年に逗子に居を構えた蘆花は、翌年に最初の文芸作品集『青山白雲』を刊行、そして同年11月から『国民新聞』に発表した「不如帰」により、一躍脚光を浴びます。そして33年、民友社から『自然と人生』を刊行し、経済的に自立するようになると、民友社との関係は自由契約となりました。それを期に、住まいを逗子から、当時の千駄ヶ谷村大字原宿字南原宿（現在の神宮前四丁目付近）に移します。蘆花は自伝的作品『富士』（大正14～昭和3年刊行）で、当時の家の周辺を次のように描いています。

此処はもう市内ではない、東京府、豊多摩郡、千駄ヶ谷村、字原宿である。市内に属する青山とは背合はせの邸つゞき、西へなだれて明るく打開いた郊外の一區。此原宿の一帶を南北に長く青山練兵場の方へ貫い

た大通りは、屋敷の間々に小さな店などがあって、やゝ町らしい容子をして居る。善光寺裏から大通りを突切つて西すれば、穂田田圃に下りる。（第三巻）

当時、東京市中に隣接していた原宿の様子がわかります。そしてこのころ、渋谷川沿いの田んぼで、写生に熱中していたらしい様子が、次の文からうかがえます。

熊次は高足駄をはいて、渋谷田畝の田川の樋の口に二日もつゞけて蹲みつゝ、空と雲と穂麦と青草と、紫雲英と、蒲公英と、小さな瀑をなして落つる田川のまづいスケッチを作るに腐心した。（第一巻）

のんびりと過ごしていたようにみえますが、原宿に移る前の32年ごろから兄蘇峰と不和になりました。それが生涯にわたって続いたことは、よく知られています。36年、原宿の自宅に黒潮社を設立し、同年に『黒潮』を刊行しました。その冒頭は、蘇峰への批判で始まっています。

現在の街並みに当時の面影はまったくありませんが、住居跡の標柱だけが、蘆花の困難な原宿時代をしのばせます。



徳富蘆花住居跡

## 文化財紹介



区指定有形文化財

### 「金王八幡宮社殿及び門 附渡り廊下」

三棟（江戸時代・大正時代）

（昭和51年度指定 平成22年 附指定）

所在地 渋谷3-5-12

#### （金王八幡宮社殿）

金王八幡宮は、「金王八幡神社社記」によると、源義家が寛治6年（1092）正月に創建したと書かれ、区内の古社のひとつです。

現在の社殿は、徳川家康の裁定により、家光が次期将軍と決められたとき、これを喜んだ青山忠俊と春日局により、元和元年（1615）までに現在の社殿が造営されたといえます。

社殿は、本殿・幣殿・拜殿からなっており、本殿は一間社流造、向拝一間、瓦棒銅板葺、拝殿は入母屋造、千鳥破風、瓦棒銅板葺で、日光東照宮を思わせるような装飾が各所に施されています。社殿は、その後しばしば修理が行われていますが、原型は失われていないと考えられます。江戸時代初期から中期の建築様式を残すものとして、区内唯一のものであり、都内においても貴重です。

門は明和6年（1769）に

建立され、享和元年（1801）に修理が行われたことがわかります。昭和63年に行われた保存修理工事の際に、屋根材を棧瓦葺から瓦棒銅板葺に変更しました。

大正10年（1921）にも社殿の大改修が行われましたが、そのときに社務所が新築されました。同十二年の関東大震災を以て、同十四年に一連の改修工事は完了しました。渡り廊下もそのころに造られたもので、社務所から社殿に直接渡れるように設計されました。宮大工の手にかかる優れた意匠をもつ建築として、戦災で多くの建造物を失った区内においては貴重です。

社殿は江戸時代の技術の粋を集めた建築物であります。渡り廊下も大正時代の宮大工の手にかかる優れた意匠をもつ建築として、保存する必要があります。

#### 【今後の展示予定】

- ◆企画展「写真展 昭和40年代の渋谷Ⅱ」  
平成26年8月7日（木）～9月23日（火）  
昭和40年代の区内各地の写真を紹介します。
- ◆企画展「東京オリンピック」展（仮）  
平成26年9月30日（火）～  
平成27年1月12日（月・祝）
- ◆企画展「賀茂真淵関係資料展」（仮）  
平成27年1月20日（火）～3月22日（日）

#### 白根記念

### 渋谷区郷土博物館・文学館

SHIBUYA FOLK AND LITERARY SHIRANE MEMORIAL MUSEUM

- 開館時間 ◆11:00～17:00（入館は16:30まで）  
※震災に伴う節電を継続し、開館時間を13:00から変更しています。詳細については、お問合せください。
- 休館日 ◆月曜日（休日の場合はその直後の平日）・年末年始
- 入館料 ◆一般:100円(80円)・小中学生:50円(40円)  
※( )内は10名以上の団体料金  
※60歳以上の方 障害のある方と付き添いの方は無料
- お問合わせ ◆東京都渋谷区東4丁目9-1 TEL:03-3486-2791

郷土博物館・文学館だより vol.26  
平成26年8月1日発行